

第2回志津川湾保全・活用計画策定委員会 議事録概要

日時：令和3年7月19日(月)14:00～16:00

会場：南三陸町自然環境活用センター交流室

出席者：阿部富士夫委員長、佐藤太一委員、菅原きえ委員、阿部民子委員、大沼ほのか委員、阿部将己委員、工藤真弓委員、高橋直哉委員、鈴木卓也委員、鈴木孝男委員、阿部拓三委員

事務局：及川主任、鈴木研究員、太齋・相澤（サステイナビリティセンター）

及川主任より挨拶の後、前回の振り返りを行った。

□前回の振り返り

事務局より、前回委員会の内容についてまとめた物を説明した。

- ・目的：将来にわたって継続的にその恵みを享受できるよう、保全とかそれについての基本的な考え方を定める。
- ・それぞれの委員にとっての志津川湾
キーワードで書き出した内容を共有した。

□議事

○志津川湾の将来像について

事務局より説明と簡単な質疑応答の後、出席委員全員がそれぞれの描く将来像について発表した。

項目例として

- ・自然環境生物の分野での将来像
- ・生業産業での将来像
- ・遊び学びの分野での将来像
- ・潤いとか安らぎ
- ・文化宗教

を目安に、10年後の姿を浮かび上がらせた。

◇遊び学び

- ・環境と防災をセットに「環境防災の教育と言えば南三陸町」が全国的に有名になっている
- ・その担い手は、志津川高校の自然科学部や南三陸少年少女自然調査隊の卒業生で、ネイチャーセンターの研究員をやっている
- ・環境教育が定期的に行われる仕組みが出来ている
- ・自然のこと、環境のことを学べるベースとなる施設がある。

- ・小学生が全て生き物に親しんでいる。遊んでいる。海との距離感が近く、干潟など安全な場所には、いつでも誰でも遊びに行ける状態となっている。
- ・近くの海の食材を取ってきて食べるような文化が伝わっていている。
- ・学校の授業で化石など、地域の資源を活用した授業が行われる
- ・化石で安らぎを。化石は文化という街になっている。
- ・環境教育の聖地と呼ばれ、全国から南三陸町に来て環境の事を学ぶ学生さんや市民が増えている。それが「南三陸らしいモデル」として全国に発信されている。
- ・ここにすればなんでもやれる、海辺の観察のモデル地域になっている。
- ・学術研究など、最新のものに簡単に触れ会える場所になっている。
- ・山と海の繋がりでの研究が進んでいる。
- ・流域全体で考え、川を下ってきて沖の方まで、イルカやマンボウやアホウドリまで見に行ける学びや遊びのフィールドがあり、商業的に活動が生まれている。
- ・「南三陸ってこういうところですよ」と、さんさん商店街だけでなく、海・山・農村地帯など全部含めて自信をもって言える人が増えている。
- ・遊びと学びが一体で、遊んでいるうちに学んでいくところが志津川湾
- ・海水浴場やアサリの潮干狩り、釣りができる。
- ・温暖化の変化はある程度受け入れるしかなく、今いる生物が見られなくなり、他の生物が見られるということを生かして、その変化から学ぶということが行われ、せめてもの学びになっている。変化から学ぶフィールドになっている。
- ・今回の委員会のような活動を積み重ねて、守りたいものをみんなの活動によって守り続けるのが理想。ひとまず活動があつてそれによって志津川湾の価値や魅力を理解した子供たちが、紙芝居を作つて各小学校の子供たちに教えている、知恵を下の子に教えるという構図が定着している。それも住民の活動が積み重なつた結果として行われている。

◇自然環境

- ・生物多様性のある海がきちんと保全され、次世代にバトンタッチできるような状態になっている。
- ・生物多様性が回復する、元に戻すというよりは、環境の変化に合わせて、南三陸町らしい生物との関わり方・環境の関わり方を目指して、生物の多様性が良くなっている。
- ・次世代にバトンタッチ出来るように開発の少ない土地の利用になっている。
- ・温暖化につれ、生物がどんどん変化している。
- ・多種多様な生物の育つ環境のモデル地域となっている。
- ・温暖化などで生き物が入れ替わつても、多様性自体が維持され、増大している。
- ・昔からの環境がずっと維持されている。

◇生業産業

- ・陸上養殖が盛んに行われている。
- ・若い世代の担い手が増えてちゃんと儲かる産業が生まれている。
- ・漁業の繁栄が続き、年収1000万以上の収入を得る事ができている。
- ・風力発電やメガソーラーなど、地域の自然環境を損ねるものでなく、地域の自然と調和的・親和的な再エネが主流になっている。
- ・調和的な再エネや、ちょっとした工夫で汽水域が作れ、生物多様性が高まる技術など、地域に密着し、フィットした技術がどんどん開発され、全国のモデル都市となっている。
- ・多くの人に認められた資源や場所を活かそう、残そうとする事業者や、漁網をTシャツやグッズに再利用するような若手起業家が増えている。
- ・漁業が盛んで収入もあり、後継者が順繰りに育って、しっかりと生活できる状態が生まれている。
- ・変化の形に合わせたやり方にシフトチェンジしている。先駆けて戸倉の皆さんでやっているようなことがすっかり定着している。環境に配慮し、このくらいは獲るけど、このくらいは獲らないよというのが定着化していて、かつ目の前にあるもので負荷をかけずに名産が品が生まれている。

◇文化宗教

- ・釣りをする漁業者と遊漁、プレジャーボートの調整が取れる地域になっている。
- ・生物多様性ととも、万物多様性も進んでいる。魑魅魍魎も神様もオカルト調査も。
- ・神社やお寺のお祭り、行事も意識され、多くの人に参加している。
- ・ナチュラルリスト、自然・生き物・天文・地質が好きな人がたくさんいる。地域学習や講座面で、専門分野のみならず、底辺拡大が行われている。
- ・湾をテーマに想いを重ねて行ってアクションを起こし、クリーン活動やワークショップや体験学習をやることによって、自然には対峙するのではなくて受け入れて生きる姿を学び、みんなが寛容になっている。それが町の文化の一つとして寛容な町だねあそこはと言われるように、結果いのちめぐるまちとして定着している。みんな無駄なものはないということがこの活動によって実現している。

◇安らぎ

- ・ヨガとかセラピーとか自然を使った健康向上プログラムが増えている。
- ・心安らぐ風景、伝統的な農村・漁村の心安らぐ風景が残されている。
- ・震災や復興の過程で失われたものがきちんと再生されている。そのために、小さな自然環境の再

生ができる自由度の高い町になっている。

- ・海を見るだけで安らげる、そんな静かな海がある。
- ・志津川湾の見ていだけで心地よい風景や美しさを積極的に町内外に届けた結果、精神的に心がどんどん荒んでいきそうな時代の中で浄化される、なんかそこに行ったら浄化されるんだよねっていう場所として有名になり、季節問わずひとに愛されている。夏だけじゃなく、冬は冬の良さっていうのがみんなに伝わっている。

○地球温暖化の状況について

政府等の公開資料に基づき、事務局より説明。

～休憩～

○目標年次と範囲について

主な意見交換

- ・環境の変化を考えると 10 年後まで待つてられない。5 年で何が出来るのかと意識を集中したときに、出来ることが見えてくるのではないか。
- ・森づくりは 50 年 100 年先を見据えての取り組みなのかもしれないが、海はさすがに 10 年後 20 年後は全然想像がつかない。
- ・ASC は 3 年更新だが、FSC は 5 年計画。3 年は短いのではないか。
- ・干潟の生き物のモニタリングをずっとやっているが、例えばアサリが大きくなって子供を出すようになるまで 3 年くらい。3 世代過ぎると大体 9 年 10 年。そのくらいになると変化したものが戻ってくる可能性はあるという話をした。実際に震災の時に生物の種数は減ったが、その後回復し、徐々に震災前よりも増えてきている。
- ・ただしどんな群集になっているか、群集の中の多様性を見ていく必要もある。環境省のモニタリングサイト 1000 は、干潟の事に関してはもう 15 年くらいのデータがあるが、結局 10 年ではよく分からない部分もあり、地球温暖化や海水温の上昇の影響が海や生き物に出てるのかという全然出てない。まだよくわかっていない。
- ・復旧工事が全部終わって、これ以上攪乱されることがないところから自然の営みの中で動いてくる。本当の回復はこれから始まるんじゃないかとしている。やはり 10 年ぐらいいを目処にみていかないとよくわからない。もちろん 10 年スパンで見えないものもあるし、10 年スパンだと長すぎるものもあるので、途中経過を見ていくのも必要。
- ・豪雨災害は、ここ数年の間にすごく増えてきたように感じている。災害など変化が強いものに関しては、トピックスとして 10 年といわずもっと短いスパンできちんと見たほうが良い。
- ・目標とする先は 10 年にして、その評価は例えば 3 年だったり 5 年だったり、そこで計画変更も

含めた議論が出来るようになればよい。

- ・目標自体が動いていくことが想定されるので、修正は必要。
- ・そこの目処としてのタイミングは多分3年とかのサイクルがもしかしたら海の方だと良いのかもしれない。
- ・区画漁業権は5年に1回の更新。共同漁業権は10年。そういう意味も10年というのは1つの目安かもしれない。

事務局：では計画は10年とし、モニタリングは続け、評価を3年ごとにしていく、そういうイメージか。何をしていく必要がある、という打ち手は随時更新になるうか。一旦10年先を目指す姿とさせて頂く。

- ・先ほど小学校の子供たちは今、海辺にいけないと話をしたが、それは学校で決められているのか。

事務局：震災前からそうであり、今も変わらないと認識している。

- ・震災直後は工事現場ばかりだったこともある
- ・以前から子供だけでは海に近づかないと言われていた。
- ・親が忙しい時には中々いけなくて声があった。
- ・海は危険なもの、危ないものという認識なのではないか。
- ・昭和50年代はそんなことなかった。
- ・誰かほら大人がいて近所の子供たちを見てくれるということはあった。
- ・最近世帯をまたいで年長さんから年少さんまで一緒に道路を渡ることが少なくなった。中学生が混ざって上の子が下の子に教えていることも。
- ・戸倉地区ではまだまだそのようなこともある。
- ・1学年10人ぐらいで推移している。
- ・そういうところの良さを上手くつなげていけばいい。
- ・子どもが海行かなくなってきた。ゲームしている。外遊び行かせた方がよい。

- ・町のシミュレーションでは、10年後の人口ってどこまで減るんのでか。

事務局：2030年だと8800人。(今は11,000。住基ケースだと12,000人。)

- ・何か政策を起こさないとどんどん人が減る。

事務局：人口が減るのはすぐには止められないので、どうやって魅力を作っていくかが重要となる。

- ・漁業従事者は多いのか。

事務局：割合としては多い。歌津も志津川も400人程度。

- ・正組合員の数は段々減ってきている。10年後はもっと減る。

事務局：漁業で成り立っているところはあるので、漁業従事者は後継者も含め一定数はいる。

・今、子供たちがラムサールの活動に参加しているが、10年先となると今の小学生が良い若者。今の小学生世代が発信するということにはスゴイ注目される。子供たちの教育というのはすごい大事。

事務局：遊び学びの意見が一番多いことにも皆さんの意識が表れている。

具体的にこうなって欲しいという目標を決めていくことが必要ではないか。例えば生物多様性がどうであるとか、あるいは海と山の繋がりがこんなに研究されてるとか。

・それは数値目標か？

事務局：最後にはそういうところに落とすことになるのではないか。その前にこうなって欲しいというイメージとしての将来像がくるのでは。

・以前共有された、備前鹿島干潟の事例にある～地域を守り・磨き、人を育み・つなぐ、持続可能な自然共生都市を目指して～のような、そういうものみんなで作るイメージか？

事務局：将来像なのでもう少し踏み込んでいけるといいかと思う。漁業でちゃんと生計が立てられる人がどのくらいいるとか、若い世代の担い手がどうか、地域に調和的な産業が確立しているなど。こんな志津川湾になっている、というのが表せるとよい。

・銀鮭養殖は漁協にとっても大きな収入になっている。現役世代がそろそろ70代になり、息子世代も頑張っているが、もう少し若い担い手が来て、一緒に仕事を手伝ってもらえないかという話もでていいる。以前、町から、漁業の繁忙期には漁業の仕事を手伝ってもらい、暇になったら農の方の仕事を手伝ってもらうような企画で、人を呼び込む話を持ちかけられた。もし実現すれば、明るい未来が開けるように感じた。

事務局：銀鮭養殖自体の見通しはどうか？

・天然物が中々取れなくなってきた中では、安定している。まだまだ輸入のものに影響されるが、比較的価値は落ち着いてきた。餌は高い。

事務局：餌と水温のリスクが心配。水温上昇については、皆さんは良しとするか？

複数人：良しとはしない。

事務局：シナリオで言えば RCP2.6 なのか 8.5 なのか、どこを目指すのかというところが大きな選択になる。

・今の質問の意味としては、逆にそこを受け入れるという可能性・方向性もあるということか？

事務局：可能性でいえば何でもあり。この場の議論で計画は作るので、皆さんのご意見をまとめる。

・RCP シナリオは、地域の局所的な努力だけでは駄目な部分ではある。だけどそれはちゃんと世界の認識としてそこに乗っかって我々なりに頑張っていくというシナリオか、もしくは変わっていくことを逆に受け入れて常に対応した手段に重きを置いていくか。努力はするが変化に柔軟な体制を作っていくことに重きを置くか。どちらの可能性もあり得る。

・後者の方だと思う。海水温の 2°C 上昇を志津川湾の人たちが頑張っても抑えることが出来ないわ

けなので、もうギリギリ 2 度上がる程度で各国が協力してやってくれるだろうということを想定して、そうなったときに志津川湾の多様性が失われないようにするには、何を考えればいいかをやるのが必要。それは受け入れる受け入れない、というより、そうなるだろうと。そういう中で、海水温の上昇と災害リスクへの対応が重要。志津川湾保全しようとしても、災害があるたびに崖崩れが頻発するなどしたら大変なので、甚大な損害を出さないように、人命を失わないように対応が出来ている、ということが当たり前になる。

・概ねそう思うが、RCP2.6 のことだけでいいのだろうか？

・目標値はずれてくる前提で対応していくしかない。

・RCP2.6 っていうのも相当頑張らないといけない。だから出来る限りやっていくってのは全世界共通だと思うが、南三陸町としては自然と共生するまちづくりを目指していて、その多様性を前面に出していきたい。教育・遊び学びも、自然を活かした次の世代までに伝えていくということをうたう上で、南三陸町はこっだけやるという、リーダーシップ・モデルケースになるような仕組みを盛り込んでいけたらよい。

・多分 3 つくらいの方角性に向けたアクションプランみたいなのが出てくる。

・我々漁業者にとっての具体的な取り組みは何かあるか？

・直結するのは、まさに漁協で取り組んでいる磯焼けの取り組み。藻場を出来るだけ保存していくのは、CO2 の吸収に繋がるし、磯焼け対策は直結すると思う。それを続けて常に藻場を維持していくことが出来れば、温暖化に貢献していける。

・二酸化炭素を削減するアクションと、災害リスクに対するアクション、生物多様性を高めるためのアクション。リンクする部分もあるだろうが、目的に合わせたアクションが生まれてくるという感じ、目標を設定してというところか。

事務局：対応策のはなしか。

・そうそう。でそれらのアクション全体をやった時にどういう世界にしたいか、みたいなことではないか。

事務局：温暖化に対し、たとえば漁業がどう対応するかという話では、ひとつは高温に適應すること。ホタテが厳しくなるがカキは大丈夫だとか、あるいはワカメも水温が上がったときにどういう密度でやったら一番いいかという事。また、雨がどうなるかで陸からの栄養供給の影響が出たり、水温が低い時は良くかき混ざって栄養が下から来るが、夏場は成層するので栄養が枯渇しがち。その時間が長くなっていくことに対応する戦略をどう立てるかという、漁業経営の話はある。一方で生物多様性の話で行くと、寒いところの生き物が消え、温かいところのものがどんどん増えてくただけけれども、そのなかで、では守りたいものは何なのか。どうしようもないものもある。ネイチャーセンターの調査で北方系のイソバテングやオコゼカジカはここ数年見ない。それはもうどうしようもない。水温下がらない限り帰ってこないの、それを守ると言っても、努力するだけ難しい。

・10 年後の将来像を描くときに、現実には現実で見なきゃいけない。理想だけ言っても難しいので、現実的にどうなのという話を、具体的に研究者の話も踏まえて聞いていけないといけない。特に漁業関係の部分では、漁師だけでどうにかなる部分じゃない話も当然ある。

事務局：打ち手と目標を、行ったり来たりしながら落としどころを探るっていうのが現実的か。一方で色んな提案していただいたり、何で生計を立てるか、どんな活動で楽しむかを想定しておき、漁業で食えなければこちらを活かそうというのも、ある程度見据えながら目標をどう作るか。それによって、この3年はこれをどんどん進めていこう、などというところも出てくるかも知れない。

・陸上養殖の話がでたが、陸上養殖に関わる将来像は何かあるか？

事務局：このまま成り行きだけでいったら陸上選択肢がなくなる。海で養殖できるものは無くなるかもしれない。酸性化が進めばカキもホタテもダメ。それは30年後なのか50年後なのか分からないけれども、50年から100年の間には来る。

・ホタテなど今の技術で陸上養殖は出来るか

事務局：お金かければできるけど、ホタテが1枚500円など、高価になっていくのではないかな。

・ホタテは今も貝毒で、貝柱しか食べれない。

・逆に、貴重になり得る可能性はありうる。そのため政策として何が必要かを提言することも可能ではないか。

事務局：銀鮭など鮭類の陸上養殖では、餌の問題も出てくる。10年後にはタンパク質危機が来るので、じゃあ具体的にはタンパク質をどうするかと。

・だからそういう目標を付けた時に、危機とか、今考えられる課題に対して、ちゃんと官民連携でアクションをしていきましょう、ということになる。

事務局：例えば大豆でタンパク質をまかなうためにたくさん生産して、銀鮭養殖に活かすなどは考えられる路線。

・津波でやられた耕作放棄地を活用してつという話もあった。

事務局：釣りではすでに魚種変わり、タチウオが釣れてる。

・最近温暖性のムツが獲れるようになってきている。南の方では高級魚扱いされてるが、ここでは見向きもされていない。だからそういうところにシフトしていくというのもひとつ。経済性を挙げるって点では重要な点かもしれない。

・フグが増え、1年中いるようになった。

・そういうものを価値化していく方向性もある。

事務局：一方で、マツモなどは全然取れなくなった。これは文化の話でもあり、我々が慣れ親しんできて、毎年節になったらもらって食うという話が無くなってくる。それが食べたい、というところに価値が出てくる。

・目標立てるのに、今の現実ってどうなってるのかを知って、目標を見せるというのがいい。現実がわからない。磯焼けは聞くけど、どうしたら磯焼けを防げるのとか、フノリとマツモはどうして無くなったのとか、ただ温暖化だからということか？

事務局：温暖化影響は限りなく黒に近い。

・現状知ると、この議論をまとめていく。

・両方が必要。

事務局：他には今、昔と違ってこんなって話あるか？

・私はカジカを専門に研究しているが、カジカは冷たい海の魚。こっちにもいたものが軒並みいなくなっている。クチバシカジカはかろうじているがちょっと少なくなってきたかもしれない。

・貝毒はどうか

事務局：増えている。

・仙台あたりでは沢山でて、ホヤやカキにまで貝毒が出るようになってきている。

・志津川湾でも、去年はホヤで出た。

・それも温暖化影響か？

・多分。そういう悪さをするようなプランクトンがどんどん増えてくるようになった。南にいたものが北に上がってきていてそれを食べる貝が毒化する。それがどんどん出るようになると結局は漁業がやっていけなくなる。海水の交換が良い湾だったらまだ良いのだが。

・海水交換するにはどうすれば？カキも浄化するのでは？

事務局：貝もホヤも貝毒プランクトンを食べ、浄化はするけど毒は貝の中に蓄積する。そうすると人間は食えない。海ではその貝毒プランクトンと珪藻類とのせめぎ合いがあつて、珪藻が増えれば貝毒プランクトンが増えづらいと言われてる。そのためには川からの流れ込みが一定にあることも必要だが、一定じゃなくなってきた。

複数委員：やはり山も守らないと駄目。

・今クワガタとか見ても、昔とれたデカいやつが全然捕まんない。小型化するの、気温が高いっていうのと餌が少ないっていうのと。山が悪さをしている。

・昆虫といえば、夜高速とか走っていてぶつかってくる虫の量がめっちゃめっちゃ少なくなっていないか？昔東北道夜走ったら、フロントが全面虫の死骸だらけだったけど今は大したことないと思う。昆虫の全体量が減ってるのではないか。

・南の昆虫で今まで見なかった昆虫も見つかっている。その報告例が去年見つけたカメムシ。

事務局：このようにちゃんと変化を見てる方がいると分かる。

・ナラ枯れも来ている。ナラの木に虫の入った穴があつて、、

・平成の森でなっているという？

・なっている。もうあとは枯れるだけ。

・カシノナガキクイムシがはいつて悪さする。大体ミズナラの大木からやられる。

・最近はそのも通り越して、普通のコナラとか大木までじゃなくても入っている。今までマツクイムシどうしようだったのが、マツクイはもうどうしようもなくなり、次はナラ枯れ。

・あれもやっぱり大径木からやられて、日本海側とかもう 10 年くらい前からすごい流行し始まって、今はもう日本海側は最上川流域など大木は全部枯れてしまった。もともと薪炭林で使われていた山が使われなくなって、でっかい木が増えたんで害虫の被害も目立ってきたんじゃないかって話

もある。ある程度特に南三陸みたいなどこだを使って更新して、というサイクルをまわさない。

・枯れる前にちゃんと使わないと、というのもある。あとはイノシシ来たりニホンジカ増えたり獣害系の話。

事務局：そういう意味ではだから、定期的に見てる、定期的に使ってるって状態がないと、おかしいことがあっても分かんないし、手が打てないですね。

・砂浜に住んでるスナガニっていうのがいるんが、ここら辺にも沢山いる。最近沖縄とか南の方にしかいなかったツノメガニ、ナンヨウスナガニっていうのが、どんどん北上してきてて、仙台湾ではどっちも見つかる。ここら辺でいうと大谷海岸でもナンヨウスナガニが見つかる。彼らは夏の間は海流に乗ってきて住むが、こっちの方では冬の寒さで越冬できない。だから小さいしか見つからない。まだ繁殖個体は見つかってない。しかし、温暖化していくと今度そこで冬越して繁殖していくかもしれない。

事務局：そういう意味ではモニタリングとかあるいは使い続けるということをしなないと。継続できる何かしきつと残らないのではないかな。継続的にやり続けられることは何かっていうところがもしかすると、重要かもしれない。

・現状がどうなってるかってきちんと把握しておかないと、変わったのかどうかも分からない。

事務局：この町のすごいところは、ネイチャーセンターが海でそれをずっと重ねてきたし、例えば卓也さんがワシとかコクガンなんかも記録をとってきた。FSC や ASC も記録を取り続ける。ましてマニア、虫や化石とでは、勝手に楽しみながら記録するわけなので、そういうところは重要。人が勝手にやってくれるっていうか、好きな人が勝手にどんどんやってくれることは応援する、そこはひとつ大事かもしれない。同時にやるべきことをどういう風にやり続けるかという、その仕組みをどう作るか。結構大事かもしれない。

・関連の話で、実は志津川湾である大学が新しい研究事業を始めるか始めないかって話になったときに、そこで南三陸町の優秀なスタッフが、いやそこに行くまでにまだちょっと早いんじゃないっていう話を漁協の方にしてもらった。漁協としても南三陸町と色んな事業を一緒にやっていこうとは思っているが、そこで町の方からこの事業は早いよっていうところで諫めてもらったっていうのは私たちからすると、非常に有難い。常に見てるからそういう話もできるんだっていうところが、私たちからすれば非常に有難かった。それは非常に大切な事なんだなと。もちろん何 10 年後かになってそれがこの評価のやった方が良いかどうかは分からないが。

事務局：はい、ありがとうございます。約束の時間過ぎてしまったが、皆さんには自分の分野で結構なので、やり続けられるってことはどんなことか、10 年後も守り続けられている、使い続けられているアクションとは何かを次回までに考えてきて頂きたい。やり続けた結果が将来像になってくるイメージだと思う。次回で将来像を決めさせていただければと思う。

・成り行きでの未来の姿という部分になるのか？

事務局：成り行きはおそらく先ほどの温暖化の話の延長なので、それを皆さんがそれじゃ嫌という場合に、そうじゃなくてこういう姿が良いと。そしてそれは多分自分がアクションし続けられるところの先にある部分であるので、じゃあ自分は何をし続けられるのか？というところの 2 つの観点。

将来こういう風にあってほしい。うちはこういうことやっていくよというものを書いていただけるとよい。

・次回までではなく、出来れば事前にか？

事務局：メッセージを頂ければ、まとめたのを皆さんにお返りする。

・自分を中心に考えるのか？自分だったらこれが出来るっていう。

事務局：でもよい。こういう風になって欲しいからどうするかという。

・自分ひとりじゃちょっとあれだけど、みんなでやればで出来そうとか、個人個人ではちょっと限られると思うが。

次回の委員会の開催日程

阿部委員長：次回はいつ頃の予定か。

事務局：次回は9月を予定している。

・・・調整・・・

事務局：では8月27日に、次は開催したい。14時からでお願いします。

・話が興味深いというか面白い。

・こういう話中々する機会がない。

事務局：そういう場が増えていくとよい。

住民向けWSについて案内

終了